2023 年度　研究旅行奨励制度　報告書

北海道のアイヌ民族について

―「ゴールデンカムイ」をはじめとするメディアの影響―

24AR177　深川　花音

はじめに
・研究旅行の目的
・期待される成果
・研究旅行日程表

1.「ゴールデンカムイ」について
・あらすじ
・作者について
・「ゴールデンカムイ」で描かれるアイヌ民族

2.アイヌ民族について
・アイヌ民族と文化

3.現在のアイヌ文化について
・アイヌ文化に対する法律
・現在も続くアイヌ文化
〇阿寒湖アイヌコタン
〇ウポポイ(民族共生象徴空間)

おわりに

はじめに

・研究旅行の目的

今回の旅行の目的は、野田サトル氏の「ゴールデンカムイ」・川越宗一郎氏の小説「熱源」をはじめとした作品が大きく話題になったことから、近年様々な角度から注目を集めている北海道のアイヌ民族の歴史や現在まで続いている文化についての調査を行うことである。今回、主に調査を行ったのは現地の博物館や記念館である。アイヌ民族は文字を持たない民族であるため、文化や生活がアイヌの手で記されている文献がほとんどない。そのため、北海道にあるアイヌ文化を主軸とした展示のある博物館や現在も残っているアイヌ民族の集落(コタン)を訪れ、アイヌが使用していた道具や民族衣装の実物やアイヌの伝統芸能など文献では知りえない文化を実際に目にすることでよりアイヌ文化に対する理解を深めたい。

また、漫画「ゴールデンカムイ」に重点を置いて、アイヌを題材にした作品がアイヌの文化にどのように影響しているかと、アイヌ民族をはじめとした多くの人々によって行われているアイヌ文化の保存や振興について考えたい。

・期待される効果

①現地の博物館、記念館やコタン(集落)にある民族衣装やアイヌ固有の道具、アイヌ文化を実際に間近で見ることが出来る。

②文献や写真だけでは知ることが出来ない部分を、現地で保管することができ、理解を深めることが出来る。

③実際に現地へ赴くことで、「ゴールデンカムイ」などの作品がどのような影響があるのか確認することが出来る。

研究旅行日程

第 1 日目	福岡→北海道(釧路市)	阿寒湖アイヌコタン
第 2 日目	釧路市	阿寒湖アイヌコタン 釧路湿原 釧路市立博物館
第 3 日目	旭川市	旭山動物園 旭川市博物館 川村カ子トアイヌ記念館
第 4 日目	白老市	ウポポイ(民族共生象徴空間)
第 5 日目	北海道→福岡	移動日

1.ゴールデンカムイについて

・ゴールデンカムイとは

「ゴールデンカムイ」は野田サトル氏による日本の漫画である。2014 年 8 月－2022 年 4 月に週刊ヤングジャンプ(集英社)にて連載された。シリーズ累計 2500 万部を突破している。北海道を舞台とし、明治時代前後の歴史ロマン、アイヌの民俗文化、狩猟・グルメを題材にストーリーが展開される。

当作品でアイヌ語を監修しているのはアイヌ語研究者の中川裕氏。

2019 年にイギリス・大英博物館で行われた「The Citi exhibition Manga」では、ヒロインのアシリパがキービジュアルに採用された。

野田サトル氏の主な受賞歴

2016 年 「マンガ大賞 2016」大賞

2018 年 「手塚治虫文化賞」マンガ大賞

2022 年 「第 51 回日本漫画家協会賞」大賞

野田サトル氏について

著者・野田サトル/北海道北広島出身

2003 年に別冊ヤングマガジンにて読み切り作品でデビュー

「恭子さんの凶という今日」

2011 年週刊ヤングジャンプにて連載デビュー

「スピナマラダ！」

2014 年週刊ヤングジャンプにて「ゴールデンカムイ」連載開始

2018 年アニメ「ゴールデンカムイ」アニメ放送開始

2022 年 漫画「ゴールデンカムイ」完結（全 31 巻）

映画「ゴールデンカムイ」実写映画化発表

2024 年 1 月 19 日 映画「ゴールデンカムイ」公開決定

「ゴールデンカムイ」のあらすじ

舞台は明治末期の北海道。日露戦争からの帰還兵・杉元佐一は、とある願いのため一攫千金を夢見て北海道を訪れていた。そこで「アイヌの埋蔵金伝説」を聞く。アイヌの少女・アシリパに命の危機を救われた杉元は、埋蔵金伝説に父の死が関わっているというアシリパと共に埋蔵金のありかと事件の真相を知るために行動を共にする。同じく埋蔵金を狙う、脱獄囚 や「陸軍最強」と歌われた北海道第七師団など様々な勢力が入り乱れる"埋蔵金獲得レース"に巻き込まれていく。冒険あり、バトルあり、歴史浪漫あり、狩猟・グルメあり。北海道を舞台にした「一攫千金サバイバル」の行方はいかに。

・ゴールデンカムイで描かれるアイヌ民族
「ゴールデンカムイ」にはヒロイン・アシリパを中心に、様々なアイヌ民族の人々が登場し、生活の軸であった「狩猟・採集」や、食、服飾などの民俗文化が描かれる。また、「カムイ」などの精神文化も描かれる。アイヌにおいて重要なカムイであるヒグマ（キムンカムイ）との関わりが多く描かれ、「ウェンカムイ」(人喰いをした悪い神)や「イオマンテ」（クマ送り）の様子も描写される。樺太アイヌや海辺に住むアイヌも登場し、地方により少しずつ異なるアイヌの文化も見ることが出来る。また「ゴールデンカムイ」は、現在も伝統的なアイヌの工芸を継承している作家の方々の協力を得ている。2024 年公開予定の実写版・映画「ゴールデンカムイ」でも、ヒロイン・アシリパの衣装は関根真紀氏の刺繍、使用しているマキリやタシロは、貝澤徹氏が制作したものである。両人とも二風谷出身のアイヌである。漫画作品の方でも、登場するアイヌのマキリなどの資料は作家が制作した実物を使用している。また、専門家や現地での取材を重ねるなど徹底的な取材主義を貫いている。現地の作家の方も、野田氏が現地に何度も足を運んでいることや、「ゴールデンカムイ」内のアイヌ文化についての詳しい描写・表現に感心している様子であった。しかし、描かれているアイヌ文化全てが歴史に準拠しているわけではない。男性、女性の仕事が明確に別れているアイヌ民族においてヒロイン・アシリパが狩猟を得意としていることや、樺太アイヌであるキロランケが時代背景的に禁止されていたニンカリ（耳飾り）をしていることなど矛盾が見られる箇所も存在する。また、当作品におけるアイヌ民族と和人の距離感にも歴史背景との相違がみられる。このことから、盲目的に信じるのではなく、歴史的資料や背景から考察する必要がある

2.アイヌ民族について
・アイヌ民族と文化
アイヌ民族は、古くから主に北海道・千島列島・樺太南部・本州東北部で暮らしてきた日本の先住民族である。独自の言語であるアイヌ語や文化をもち、北の大地で固有の文化を築いてきた。平成 29 年度「北海道アイヌ生活実態調査」によれば、この調査の対象となったアイヌの人々は、5,571 世帯・13,118 人である[1]が、調査の対象となったのは、各市町村が把握できた人数であり、道内に居住しているアイヌの人々の全数ではない。アイヌであるということを公表していない場合が多く、実際はこの数倍にもなると思われる。これは、長年の差別などが影響いると考えられる。また、全国各地にアイヌの人々は住んでお

[1] *・この調査の対象における「アイヌ」とは「地域社会でアイヌの血を受け継いでいると思われる方、婚姻・養子縁組届等によりそれらの方と同一生計を営んでいる方」である。

り、祖父母などの祖先がアイヌ出会ったことから隔世的にアイヌ民族としての自覚を持っている人々もいる。民族名の「アイヌ」とは「人間」を意味し、彼らの文化で特徴的な「カムイ」という存在と対の意味になっている。アイヌでは人間の生活に役に立つもの、良い影響を与えるものを「カムイ」であると定義づけている。ただ恩恵を受けるのではなく、供物や感謝の祈りを捧げる儀式を行う。明治時代に日本政府からの同化政策を受ける以前まで、アイヌ民族の生活の軸は「狩猟・採集」が主であった。アイヌの使用する道具や家屋のほとんどが手作業で作られたものである。この事や、「カムイ」などの精神観から、自然と共生する自給自足的な面が、印象に残りがちであるが、江戸時代以前から本州をはじめとした近隣の国や民族と交易を行ってきた。アイヌの伝統的な祭具「トゥキ」や装身具「タマサイ」などにこの影響が見られる。また、アイヌの使用する「マキリ」や「タシロ」などの刃も交易によって手に入れている。

図１　樹皮布(アットゥシ)を織る女性「釧路市立博物館」　撮影：深川花音

図２　タマサイ
「アイヌアートギャラリーコタン屋」
(阿寒湖アイヌコタン内)
撮影：深川花音

図３　トゥキ
「アイヌアートギャラリーコタン屋」
(阿寒湖アイヌコタン内)
撮影：深川花音

3. 現在のアイヌ文化について

・アイヌ文化に対する法律

1997 年「アイヌ文化振興法」が制定される。この法律はアイヌの伝統的な文化の保護と継承を国が支援する制度の創出に関する法律である。しかし、この法律は文化の振興に重きを置いており、アイヌ民族の権利の保障や長年の差別や経済格差を解決するものではなかった。2007 年の国連で「先住民族の権利に対する宣言」が採択されたことを受け、2008 年の国会において「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択される。これが 2019 年に「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が制定されることに繋がる。この新法には、従来の振興法や福祉政策に加え、アイヌ民族が日本の先住民族であることが明記されている。

・現在も続くアイヌ文化

普段の生活で使用されてきた、オヒョウなどの木皮の繊維を使用した織物「アットゥシ」から作られた衣服や、狩猟用の鞘や柄に木彫りの装飾が施された刃物であるマキリは、現在でも伝統工芸・民芸品として様々に形を変え残り続けている。釧路の阿寒湖や平取町の二風谷など、古くからアイヌのコタンが存在してきた土地では、アイヌの伝統工芸・民芸品の作家として活動しているアイヌの人々がいる。

また、伝統芸能である古式舞踊や独自の食文化に関しても、各地に保存会などの団体が存在し、文化を伝承し続けている。

〇阿寒湖アイヌコタン

釧路市阿寒町にある阿寒湖の湖畔にあるコタン（村）。阿寒湖アイヌコタンは創り手の町であり、20 を超える伝統工芸や伝統料理を扱う店が立ち並んでいる。当時の生活用具や衣装が展示されているアイヌ生活記念館「ポンチセ」やアートミュージアム「オンネチセ」

で歴史や文化を学ぶことができる。国内初のアイヌ民族舞踊専用劇場「阿寒湖アイヌシアター〈イコロ〉」では、伝統的な古式舞踊と現代舞踊、デジタルアートを融合させた舞台を鑑賞することもできる。民芸店などが立ち並ぶ場所から少し離れた 場所では、「カムイルミナ 阿寒湖の森 ナイトウォーク」が開催されている。これはカナダのマルチメディア・エンターテイメント・カンパニーMoment Factory 社が制作した「ルミナ・ナイトウォーク・シリーズ」の 10 作目となる作品である。ここでは阿寒湖に伝わるアイヌの物語「フクロウとカケスの物語」をベースとしたストーリーがプロジェクション・マッピングなど、最新鋭のデジタル技術がほどこされた阿寒摩周国立公園のなかで、展開される。ただ見聞きするのではなく、参加しながらアイヌ文化に触れることのできる体験型ナイトウォークである。

図 4　阿寒湖アイヌコタン
撮影：深川花音

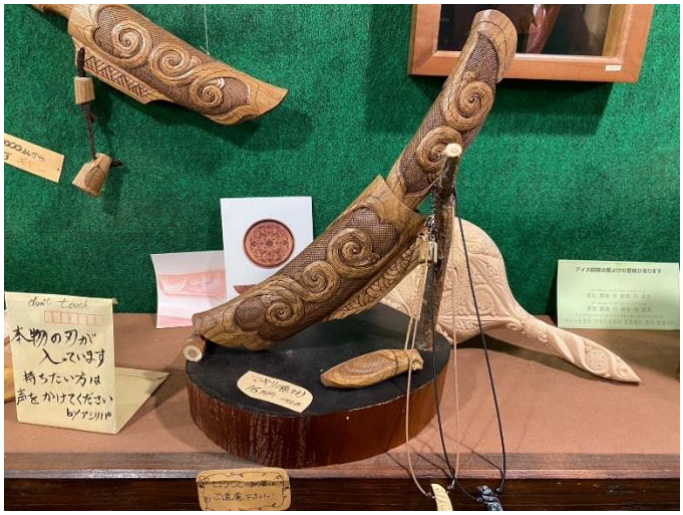

図５　マキリ
「マツネシリ民芸店」
撮影：深川花音

〇ウポポイ（民族共生象徴空間）
ウポポイとは白老郡白老町にある民族共生象徴空間の愛称である。主に国立アイヌ民族博物館、白老町のアイヌコタンを元に作られた伝統的コタン、慰霊施設、スタッフによる作品作りの実演や、木彫やアイヌ刺繍の体験ができる工房、伝統料理の調理や楽器演奏などの文化体験のできる体験学習館、アイヌ古式舞踊やムックリ演奏などのアイヌの伝統芸能の上演がされている体験交流ホールで構成されている。ウポポイでは、場内での公用語としてアイヌ語を推奨している。「イランカラプテ」（こんにちは）や「イヤイレイケレ」（ありがとう）などスタッフからの声掛けやプログラムの際に多く使われる。また、伝統的コタンでは、アイヌのチセ（家屋）が再現されており、実際の生活感じられる空間の中で、独特な発音やアクセントのあるアイヌ語の学習プログラムや伝統的なウポポ（座り歌）を実際に使用していた道具を使い体験ができる。体験交流ホールでは、ウポポイで組まれている伝統芸能のプログラムだけでなく、北海道各地のアイヌ文化の保存会による古式舞踊の披露が行われている。各地で特色の違うアイヌの伝統芸能を見学できる。私がウポポイを訪れた際には、白糠アイヌ文化保存会の方たちによるフンペリュセをはじめとする伝統芸能を見学した。

図 6 イオマンテの衣装を着た子熊　「ウポポイ　民族共生象徴空間」　撮影：深川花音

図 7　祭事衣装(女性)
「ウポポイ　民族共生象徴空間」
撮影：深川花音

図８　祭事衣装(男性)
「ウポポイ　民族共生象徴空間」
撮影：深川花音

おわりに

今回は北海道を訪れ、アイヌ民族の歴史や文化について調査した。実際に現地を訪れ、工芸作家の方やアイヌをアイデンティティとする方々にお話を聞くことができた。その中で、「ゴールデンカムイ」をはじめとする、アイヌを題材にした作品の影響が強いことを実感した。阿寒湖アイヌコタンのマツネシリ民芸店のご主人は、現在の阿寒湖アイヌコタンで「マキリ」（小刀）を制作できる２人のうちの１人なのだが、「ゴールデンカムイ」の影響で、この「マキリ」を求めて訪れる人がかなりいると仰っていた。現在制作されている「マキリ」は使用する目的ではなく、鑑賞目的な要素が強いため、かなり意匠が凝っている。また、大きな作品でもあるためかなり値段も張る。もちろん作品の影響が全てではないと思うが、こういった工芸品や文化にたいする興味感心に大きな影響を及ぼしているのは間違いないのではないだろうか。そして、漫画が完結した現在でも、北海道の各地で「ゴールデンカムイ」とコラボしたイベントが行われている事や、アイヌに関する展示がある博物館のいくつかには、著者の野田サトル氏の直筆のサイン色紙が置いてあるなど、作品がアイヌ文化の振興の一端を担っていることがうかがえる。2024 年には、菅原浩志監督でアイヌの叙事詩を翻訳し、文字に残した「アイヌ神謡集」の著者・知里幸恵の 19

年の生涯を描いた「カムイのうた」が公開される。こういったアイヌ民族の歴史や文化を題材にした作品が、アイヌ文化の振興に大きな影響を与えることを強く感じた。
また、今回の調査でアイヌの伝統的な工芸品に強く関心を持った。その中で、アイヌにルーツを持つ人と家族になったことでアイヌの工芸や芸能に関わるようになった人、芸術を学ぶ中でアイヌの工芸に関心を持った人、アイヌの工芸を継承し、守る人々が必ずしもアイヌにルーツを持つ人でないことを知った。近年では、こういった伝統的な民芸品がコロナウイルスにおけるパンデミックの影響を受けている。感染症や、高齢化により工房を閉めた職人も少なくないと現地の方に伺った。こういった点もアイヌ文化振興を考える上での課題点の一つである。また、ウポポイのスタッフの方のお話では、自分がアイヌの血を引いていることを大人になるまで知らなかったが、大人になりその事実を知ったことでアイヌとしての自覚を持ち、自らのアイデンティティを学ぶためにウポポイで働いていることを伺った。現在でもアイヌの人々の中には受け続けてきた差別により、自らの出生を周囲の人だけでなく、家族にも隠している人もいる。そういった背景をへて、隔世的に自らがアイヌであると知り、アイヌというアイデンティティを自覚し、アイヌ文化の振興に力を尽くしている人がいる。このことから、根強く残る差別の過酷さと、アイヌの文化が普及することで、自らのルーツを知ることが出来る人がいること、これがアイヌの文化や歴史の保存や継承に繋がっていることを感じた。メディアなどの影響で広くアイヌ文化が知られていく中で、誤った情報が流されないかが課題点だと考えられる。
今後は、アイヌ文化復興のきっかけとなった、知里幸恵さんの活動や彼女の生きた時代背景から、アイヌに対する差別や同化政策について調べていく。

〈参考資料〉

・野田サトル　『ゴールデンカムイ』　集英社　2014－2022 年
・中川裕　『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』　集英社新書　2019 年
・瀬川拓郎　『カラー版・1 時間でわかるアイヌ文化と歴史』宝島新書　2019 年
・北原モコットゥナシ，谷本晃久『アイヌの真実』ベスト新書　2020 年
・公益財団法人 アイヌ民族文化財団 「アイヌ生活文化再現マニュアル」
https://www.ff-ainu.or.jp/web/learn/culture/manual/index.html
・アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会「報告書」2009 年
https://nam.go.jp/wp/wp-content/uploads/2020/10/siryou1.pdf
・公益社団法人北海道アイヌ協会 「アイヌ文化振興法の概要」
https://www.ainu-assn.or.jp/ainupeople/overview.html
・北海道庁「平成 29 年度 北海道アイヌ生活実態調査報告書」
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/new_jittai.html
・ウポポイ「民族共生象徴空間」

https://ainu-upopoy.jp
・阿寒湖アイヌコタン
https://www.akanainu.jp
・カムイルミナ
https://www.kamuylumina.jp
・釧路市立博物館
https://www.city.kushiro.lg.jp/museum/
・旭川市博物館　（旭川市 HP）
https://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/hakubutukan/
・釧路湿原国立公園
https://www.env.go.jp/park/kushiro/
・川村カ子トアイヌ記念館
http://k-aynu-mh.jp
・ゴールデンカムイ公式サイト–週刊ヤングジャンプ
https://youngjump.jp/goldenkamuy/
・TV アニメ「ゴールデンカムイ」公式サイト
https://kamuy-anime.com
・映画「ゴールデンカムイ」公式サイト
https://kamuy-movie.com